百々裏話（74）

おもて　あきら

〔明和改正謡本の周辺―その九〕

◉『副言巻』について（3）

『副言巻』第十一に収められている十八曲の謡間のうち、前回に内容を紹介した分を除く十一曲のアイは、狂言方に伝わっていた形跡が無く、新作と見られる謡間である。

まず放生川の「鱗物ウロクツ」は、ヲモが放生川に年経て住む鯉、アド（複数）が淀川で生け捕られて放生川に放された魚達で、鯉が新参のアドに放生会の由来を語り聞かせ、祝賀の酒宴を催し、アドが囃してヲモが舞う形で鯉の徳を謡い舞う。末尾の文句「かかれば爾雅の釈魚の篇にも、鯉をはじめにあげられたり」から知られるように、元章好みの衒学的文句が連なっている。狂言方諸流は語り間の形であるが、鷺流は末社間をも伝えていた。

西王母の「青鳥セイテウ」は、西王母に仕える三足の青鳥（謡曲東方朔に名の見える鳥）がヲモで、諸鳥（アド）を伴なって出て、前段の梗概を語り、酒宴となって、「いざや酒宴をなさんとて、〳〵、ひたきに酒を、あたためさせて、瑠璃の鳥瓶子、鸚鵡盃を、座の真中に、シトゞ置て、廻りに皆々つぐみて連雀し、三光のみつつ鳥々に、コマ鳴りの声立て〳〵、あそびかなづる、目出度さよ」の鳥尽くしの謡で終る。狂言方諸流の中入間は、口開を勤めた官人の立シャベリで、フレで終る形。

雲林院の「鉢鳴ハチタタキ」は、狂言の「鉢叩」に似て異なる。鉢叩きの一行が謡い奏でつつ茶筅を売り歩いていると、いつの間にかヲモの翁ジヤウの神が一行に加わり、長々と謡って売り歩くうちに雲林院に到着する。鉢叩きに不審されて名を名のり、問われて翁の神の由来を語り、ヲモは消え失せる。鉢叩き一行の登場の謡や末尾で「瓢箪しばしば止り給へ」とヲモを引き留めるあたりの文句は「鉢叩」と似ているが、長文の囃し物の文句は全く違う。狂言「鉢叩」では瓢の神は北野の末社であり、「瓢の神」では松の尾の大明神を鉢叩の守護神としている。雲林院のアイに鉢叩や翁の神を登場させた根拠は明らかでない。狂言方諸流は語り間である。

小鍛冶の「多々良部卯花タヽラヘウノハナ」は、稲荷山のタヽラへと卯の花の精が出て、前段の説明を兼ねて出て来た理由を語り、自分達が神に近い姿を得た由来（稲荷の三月の祭には人々が烏帽子にタヽラへの花を飾り、四月の祭には卯花をかざしにするゆえと言う）

〈次回予告〉

9月11日（金） 6時開演

能 **梅枝**（うめがえ） 観世 静夫

狂言 **右近左近**（おこさこ） 大蔵弥太郎

能 **舎利**（しゃり） ツレ 長山礼三郎 山本 順之

11月13日（金） 6時開演

能 **花筐**（はながたみ） 大返し 観世 寿夫

狂言 **萩大名**（はぎだいみょう） 野村 万蔵

能 **野守**（のもり） 若松 宏充

12月11日（金） 6時開演

舞囃子 **絵馬**（えま） 山口 幸徳

狂言 **鉢叩**（はちたたき） 野村万之丞

能 **楊貴妃**（ようきひ） 観世銕之丞

を互に説明し合って、稲荷の神幸を拝むため相舞を舞いつつ宗近の私宅へ赴く。タヽラヘは辞書類に名の見えぬ花で、恐らくは『政事要略』所収の風俗歌に「たたらめの花の如、かい練好むや、げに紫の色好むや」とあるタタラメの花のことであろう。但し右の歌詞によればタヽラメは紫色の花のはずなのに、「多々良部卯花」では黄色としている。或は『源氏物語』末摘花の巻に右の風俗歌を引用した文句があるのに基づいて持ち出した花の名であろうか。こうした難語を持ち出すあたりも元章好みの顕著に現われている点と言えよう。

狂言方の小鍛冶のアイは、大蔵流は末社、和泉流と鷺流は宗近の家来や弟子で、立シャベリ、末はフレで終る形である。

春日竜神の「若草」は、ウハギ・ツバナ・ワカムラサキ・サワラビ・ワカナ等の春日野の若菜の精が出て、末は一同で若菜尽くしを謡い舞う。春日竜神は末社、社人の立シャベリ、観世流専用の語リ間の他に、替間として「猿」(脇能用)や「町積り」があり、最もアイの形式が錯綜している曲であるのに、更に新しい形を加えているわけである。

右近の「桜」は、右近の馬場の桜の精がヲモで、桜場の神の縁起を語り、三月今日の恒例ということで桜の精どもを呼び出して酒宴を開き、桜尽くしの謡に合わせて舞い納める。狂言方の形式は語リ間、末社間、社人間など錯綜しているが、大勢出る形は存しない。

難波の「松囃子」は、同名の狂言とは無縁である。山城国梅の宮の神職が出て長々と祭神木花咲也姫の由来を語り、神々の奏でる楽の音を聞くため難波へ下ると、ヲモに引き連れられた松囃子の一行が囃しながら登場し、神職に所望されて松囃子を舞う。囃子物の文句は格別に面白みの無い祝言謡である。住吉の松の縁で松囃子を登場させたらしい。狂言方の分は鷺流に観世のための語リ間を伝えた他は末社形式で、「鳶が鳴く」と言って引っこむ大蔵流の形が古いものらしい。

呉服の「繻錦シュウキン」は、能がかりのアイである。都の織殿の者達が願望あって津の国呉服の社へ思い立ち、道行の謡で呉服の松原まで来ると急に日が暮れてしまう。そこへ百数十歳の姥が夢の告によって出て来るのにアドが言葉をかけ、ヲモの姥が百年以前まで織女であったと聞いて、綵襠のための繻錦の織り方を問う。姥は詳しく謡い聞かせ、喜びの酒宴の後は舞い立ちにしてアドの一行を姥の家に誘う。呉服の神が京の織師と昔の織女とを引き合わせて繻錦の大事を相伝させるわけである。狂言方では語リ間であるが、和泉流は末社間をも伝えている。

佐保山の「婆々曽ハヽソ」は、佐保山のはは

繭の会

7月29日(水)　6時開演　観世会館

能　**班女**(はんじょ)　山本　順之
狂言　**雷**(かみなり)　和泉　保之
能　**熊坂**(くまさか)　北浪　照雄

9月28日(月)　6時開演　観世会館

能　**枕慈童**(まくらじどう)　若松　宏充
能　**融**(とおる)　浅見　真広

〈出演予定〉

7月11日(土)及び12日(日)夏の素謡仕舞会(銕仙会舞台)銕仙会所属諸師の素人弟子による大会

7月18日(土)学生能(八王子市民会館)
能隅田川(寿夫)

8月5日(水)堺薪能(堺・大鳥神社)
能小袖曽我(礼三郎・真義)
能千手郭曲之舞(銕之丞)

その精がヲモで、佐保姫の由来を語った後、ひさぎ・楓などの精を待ち受けて酒宴を開き、持ち寄った酒肴によそえた謡で舞い囃す。狂言方の形は語リ間のみのようである。

御裳濯川の「鏡石」は、ヲモの川上の鏡石の精や、二見浦の立石・沖玉石、立烏帽子岩・折烏帽子岩の精などが登場し、前段の梗概を語った後、客人(ワキ)を慰めるため石や岩の名尽くしの謡で舞ひ奏でる。狂言方では語リ間であるが、鷺流は末社間をも伝えていた。

海藻苅メカリの「魚集ウヲツドヒ」は、狂言方の形が鱗ウロクヅの精が一人のみ出る末社形式であるのに対し、大勢の精が現れて酒宴を開き、魚尽くしの謡で舞い遊ぶ。廃曲の河水のアイに似るが、魚尽くしの謡は遥かに長い。玉の井の貝尽くしのアイとも似た趣向。

以上の十一曲が、狂言方に同形態のものが伝存していない替間である。いずれも二人以上が登場する形で、末は酒宴になり、にぎやかに舞い謡うものがほとんどである。物尽くしの謡が多いのも目立つ特色である。衒学的で生硬な文辞が少なくない点などから、前回に紹介した分と同様、観世元章自身が作詞したと見てよいかと思われる。

十一曲中八曲までが脇能のアイで、春日竜神や小鍛冶が脇能に準ずる曲である点を考慮すると、雲林院のみが例外である。前回に紹介した七曲分も石橋の「仙人」以外はすべて脇能の替間であった。これは、脇能のアイが形式に変動の余地を多く残していることを由来しよう。脇能の中入の際のアイの形式は語リ間と末社間の二種に大別され、元章新作の替間はほとんどが末社間の形に属するが、語リ間か末社間かは、中入来序の囃子の有無、及びそれと表裏の関係にある後段の待謡の有無によって決定されるのが常であった。その点に変動の余地の大きいのが脇能であり、元章が脇能に替間を多く作ったという事実は、彼が脇能の演出に常とは異なる小書演出を試みたことの反映と見なしてよいであろう。

『副言巻』十一冊のうち、本稿には三冊分を紹介したに過ぎないが、副言(ワキやアイのセリフ・語リ)なるものの実態は大よそ推測できるであろう。この『副言巻』は、元章が明和の新改正を三役分担の面にまで及ぼそうとしていたことを示しており、それを脇方や狂言方がどのように受けとめていたかを精査することによって、江戸中期の座における大夫と三役の力関係など、多くの問題が発掘できるであろうが、それらについては別の機会に譲りたい。

(45・6・30)

(前回に紹介したうちの養老の「薬水」は、正保三年大蔵虎清奥書狂言本の「薬水」の趣向と最もよく似ている。古川久氏から御指摘があったので附記しておく。)

各流
はかま
帯・袴
もちや〈薗部〉
千葉県市川市真間2の11の17
電話 ○四七二―二二―六二二・九六九

能・お茶の御写真
観世写真部
前島良彦
前島久男
港区白金台二の二の三
電話白金(441)一八四七五番
〜五〇〇九番